



Floralia

Original Story ザウス(純米)

Novelization 明日間透

Original Illustration まさはる

プロローグ

7

第1章

19

第2章

53

第3章

77

第4章

101

第5章

119

第6章

139

第7章

165

第8章

189

エピローグ

226

Floration

プロローグ

麗らかな日だった。橋洋介は園芸作業の手を休め、高い空を見上げた。少し動いただけで汗が流れるくらいのが気温だが、こうやって一休みした時の、爽やかな風が心地良い。が、同時に喉の渇きも覚えていた。飲み物を買って忘れていた。洋介は、一つのこと熱中し出すと、他のことを忘れてしまうタイプなのだ。

洋介は、つい先程まで自分が世話をしていた花壇を見やった。明日は入学式だ。一人でも多くの新入生にこの花壇を見てもらいたい。出来るなら、この花たちに感動して、園芸部に参加してもらいたい。洋介は、そう考えていた。

(せめて、卒業していった先輩たち分の人数は欲しいよなあ)

現在、洋介の所属する園芸部は、幽霊部員を合わせて五人いる。しかし、実際に活動している部員は、洋介を含めて二人しかない。しっかりと活動していた二人の先輩が卒業してしまったので、いきなり活動人数が半減してしまったのだ。しかもこの青央学園には、花壇だけでなく温室もある。とても、二人で面倒を見切れるものではない。

洋介として、プロの園芸家ではない。気が向かない時もあるし、他に用事がある時もある。一度作業に没頭してしまえば終わるまでやり続けるが、園芸に命をかけている訳でもない。

い。ただ少しだけ花が好きで、他に特別趣味といったものを持たない普通の青年。それが橘洋介という人間だった。

「喉、渴いたな……」

独りごちながら空を見上げようとした洋介の視界を、キンギョソウを擬人化したかのような、愛らしい一人の少女が遮った。黒目がちな涼やかな双眸に、小さな口元がキュートな少女だ。赤いリボンで飾られた、腰まである長い黒髪が、風になびいた。

「ジュースでも持つてくれば良かったかな……気が利かなくて……」
去年まで同じクラスだった白瀬憂が、洋介の独り言に答えた。

「い、いや独り言だからさ。まさか白瀬さんが近くにいたなんて気がつかなくて」
「何だか疲れているみたいだったから、声かけにくくて……」

「はは、そんなの気にしなくていいよ。ちよっと一休みしてただけだから」
空を背景に立つ少女は、洋介につられて微笑みを見せた。まるで後光が差しているような姿の憂に、洋介は、花の妖精が降りてきたような錯覚を覚えた。彼女ほど『清純な心』という、キンギョソウの花言葉が似合う少女はいないだろう。

洋介と憂は、昨年一年間級長を共に務めた、仲の良い友人だ。そして、級長だったからという理由だけで、入学式準備委員も任されることになった。洋介は花壇の世話を、憂は式場となる体育館の準備等をしている。

洋介の花壇の世話は、どのみち部活でやらないといけませんが、憂は本来春休みだ。

のんびりしていればいいのに、面倒な仕事を引き受けるところが憂らしいと、洋介は思っていた。

憂は、ずば抜けて成績が良いという訳でもないし、運動神経が飛び抜けている訳でもない。部活には所属せず、一年生の時は学級委員と図書委員を兼ねていただけで、どちらかと言えば地味な学生生活をしている。

なのに、目立っているのは、彼女の美徳や明朗さ、人見知りしない性格、そして、何よりも彼女の愛らしさのためだ。男女問わず友人が多く、クラスでは中心人物だった。特定の彼氏がいないことが、男子生徒からの人気をより高めていた。少々ドジなところがあるが、それすら彼女の可愛らしさを損なうどころか、いや増していた。

「体育館の方の準備はもう終わったの？」

「うん。あとは明日の朝早めに来て、受付準備するだけだよ」

「それなら、もう帰るんでしょ？ 僕もあと少しだから、駅まで送っていくよ」

「うん。ありがとう。それなら、わたしも水撒き手伝……」

憂の言葉が途中で途切れ、ボタンッ、という音が響いた。地面に目をやると、伸びていたホースに足を取られ、受け身を取ることも出来ず、見事に転んだ憂がいた。

「ういゝ、ドジィ」

むっくりと起きあがった憂は、制服の前面を砂だらけにして泣きべそをかいたような顔をしていた。だが、大事はなさそうだ。

「温室に綺麗なタオルがあるから、それではたいておいでよ。僕はその間に水撒き済ませちゃうからさ」

「うう……ごめんね。手伝うつもりが、邪魔しちゃっただけみたい」

「ううん、そんなことないよ。楽しい光景も見せてもらえたい……」

「ういっ！ 橘くんの意地悪ういっ！」

笑ってはいけないと思いつつも、見慣れたドジっぷりに、つつい笑いが込み上げる洋介だった。

砂をタオルで落とした憂と洋介は、一緒に下校しようとしていた。一緒に帰るのは、別にこれが初めてではない。級長の仕事で遅くなった時、洋介は度々憂と二人で下校していたのだ。洋介は、憂と他愛ない話するのが好きだった。

「楽しみだね。明日の入学式。きっと初々しい子たちでいっぱいになるよ」

「楽しみと言うか、園芸部としては切実だよ。入部希望者が一人でも……」

憂を見ていた視界の端に、数人の教師らしき大人たちが入ってきた。洋介は、そこに見知った顔がいた気がして、つい足を止めてしまった。しかし、すぐに建物の影に入ってしまったので、確かめる暇はなかった。

「橘くん？ 誰か知ってる人でもいたの？」

「あ、いや、なんでもない、気のせいだったみたいだ……」

洋介と憂は、そのまま帰路につくのだった。

☆ ☆ ☆

洋介は、母親を早くに亡くしている。父親は学者で、イギリスの大学に招聘しょうへいされ、旅立った。つまり、洋介は独り暮らしを余儀無くされているのだ。だが、以前から父親は世界中を飛び回っているの、半年や一年の独り暮らしの経験は、今回が初めてではなかった。「すっかり遅くなっちゃったな……」

憂を送って行きながら、入学式やクラス分けはどうなるか、などと話をしていくうちに興が乗ってしまった。空腹も手伝って、ファーストフードの店に腰を落ち着け、また暫くしばらく話し込んでしまったから遅くなったのだ。

父親が発ったのはほんの数日前だから、洋介は玄関の明かりが点いているのに、何の違和感も感じずに、家に入って行った。

すると、玄関の明かりだけでなく、当然と言わんばかりに、居間の明かりも点いていた。出かける前に消したはずだ。

「おかえりっ」

凛りんとした双眸に通った鼻筋の女性が、語尾を跳ね上がらせて、そう言った。洋介は、い

きなり目の前に現れた女性への対応も忘れ、呆然と立ち尽くしてしまった。

「何よ、そんな鳩が豆鉄砲を食らったような……っ！ あんたまさか、私のこと忘れたっ
て言うんじゃないでしょうね？ もしそうならお仕置き……」

「なんで鈴姉すずねえが家にいるんだ!？」

「なあに？ そんな大声出さなくたって聞こえるわよ」

肩をすくめ、苦笑いのような表情をつくる女性は、麻生鈴音あそうすずねだった。洋介の幼馴染み、
姉役・母親役で、初めて意識した女性だ。つけ加えるなら、妙な迫力の持ち主で、洋介は
彼女の言葉に逆らえた例しがない。

家が離れてからほとんど会わなかったその鈴音が、何の違和感もなく橘家のリビングに
いた。

「それより、どうしていきなり家にいるのさ？」

「いきなりじゃないわよ。おじさんが仕事で渡英したんでしょ？ それで頼まれたの『洋
介の面倒見てやってくれ』ってね」

洋介の父親は、何度も家を空けていたが、こんなことは初めてだった。驚き、喜び、照
れ、焦りといった様々な情念が洋介の脳裏に浮かんでは消えた。つまり、洋介は混乱して
いた。

「立ち話もなんだし、夕飯食べてゆっくりしよ？」



この場は鈴音の言う通りにしておいた方が波風が立たないだろうと、洋介はジャンクフードが胃に詰まっていることを隠して、ダイニングの席についた。

「少食になったのねえ？ 子供の頃は、前菜にどんぶり飯食べてたくせに」
箸の進みが遅い洋介を見て、鈴音は言った。

「僕のどこにもそんな記憶はないよ。というか子供の頃の話するのやめてよね」

「あら、やっぱり気にする？ いっちよ前に照れてるんだ。昔はオネシヨしてわんわん泣いてたのにねえ」

懐古趣味は年を取った証拠だ、と言う洋介を鈴音は睨みつけた。それから、洋介の姿をまじまじと見つめる。

「でも本当、しばらく見ない間に随分と遅なましくなったわね……。確かにこれじゃ、もう子供扱いできないか」

「鈴姉が大学行った時はまだ小学生だったんだよ？ そりゃ成長もするさ」

「『行っちゃヤダー』って泣いてた少年が、今じゃ立派な学生か……。っと、はいはい、昔話
はもうしないわよ」

思い切り渋面になった洋介を見やって、鈴音が苦笑を漏らした。

「ところでさ。いつの間に親父と密約なんて交わしたのさ？」

「……密約とは聞こえが悪いわね」

「だって、そうじゃないか。僕は全く知らなかったんだよ」

「おじさん、そういうとこアバウトだもんね……。てつきり、話通ってると思ってたわよ」
鈴音は小首を傾げて言った。

「それより鈴姉、今どこに住んでるの？ 食事作っておいでくれたのは嬉しいんだけど、僕だってもう自分の面倒くらい見られるしさ……。わざわざ家まで来なくっても、電話とかしてくれば充分だよ。もし何かあればこっちからも電話するし……」

鈴音がニヤリと笑った。洋介の背筋にゾクリと悪寒が走る。こういう笑い方をした時の鈴音は何か良からぬことを考えているのだ、と三つ子の魂が警鐘を鳴らす。

「この鍵は、どこから手に入れたんだと思う？」

「親父からだろうね……」

「……じゃあ、それがどういう意味かは解るわよね？」

「ま、まさか……」

狼狽える洋介を見て、鈴音がニンマリと微笑んだ。それは、子供の頃、悪戯に誘おうとする時に見せた笑顔と同じであった。鈴音は、近所でも恐れられる程の悪ガキだったのだ。

「私、今日からこの家に住むから。よ・ろ・し・く」
洋介が、逆らうことは不可能だった。

☆ ☆ ☆

「参った……」

風呂から上がった洋介は、ベッドに倒れ込みながら、偽らざる本音を吐いた。

鈴音が嫌いなのではない。いや、むしろ好きな人間だ。

だが、ここ数年会わない間に成長したのは、洋介だけではなかった。鈴音の方も、得も言われぬ大人の魅力を備えていた。

洋介だって、もう十二分に性欲を持っている。鼻^ひ目^めではなく、鈴音は美人の部類に入るだろう。今は父親もいない。一つ屋根に二人つきりだ。何かと気を遣うことになるに違いない。

しかし、逆に利点も考えていた。

食事に関しては、外食が減るだろうから、その分金銭的余裕も出るだろう。ペランダにも観葉植物が欲しいと思っていたし、新しいハーブを育ててみるのもいいかも知れない。

「あ……」

ふと、自分の花好きは、鈴音に仕込まれたものだったことを思い出した。中学、高校と彼女が所属した園芸部。子供ながらに、鈴音に花は似合わないと思っていた。何しろ、当時の鈴音は、男顔負けの悪ガキだったのだから。

それでも、鈴音は熱心に部活を続け、聞きもしないのに園芸知識を教えてくれた。なけなしの小遣いで、鈴音の誕生日に鉢植えを贈ったのを覚えている。その時の鈴音の

笑顔は、それまで感じたこともなかった気持ちで洋介に植えつけたのだ。

初恋、とそれを認識したのは、もう少し時間が経ってからのことだったけれど。「そう言えば、鈴姉の仕事聞いてなかったな……」

眠気に支配されかかっているのか、思考に脈絡がなかった。

何故か安心感に包まれていた。

洋介は、意識の全てをそこに投げ出した。